



1992 年 (平成 四年)
5 月号 (No. 564)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

- 1992 年日中ナムチャバルワ合同登山
隊準備開始……………(1)
海外の山……………(2)
「カトリヌの冒険」
第 28 回秩父宮記念学術賞授賞(3)
ヘンダーソン夫人を偲んで
……………村山雅美……………(4)
東西南北……………(5)
「三角点の向きについて」故森山欽
司運輸大臣と芦安村) ほか
計 報……………(6)
図書室だより(9)、書籍図書受入報告、
日本山岳会蔵山岳地図目録
……………(7)~(9)
図書紹介……………(8)
「私のスケッチ紀行」千葉大の山
40 年) ほか
自然保護随想……………(10)
報 告……………(14)
「第 20 回山岳史懇談会」「マッキン
リー気象観測報告会(下)」ほか
会務報告……………(17)
3 月定例理事会、ルーム日誌、山研
・ナムチャ合同募金応募状況、新入
会員(復活)、住所・住居表示変更
お知らせ……………(18)

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10 時~20 時
水、金曜 13 時~20 時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13 時~20 時

お知らせテラップ電話
3234 六六五九

山隊についての協
力方要請した。
引き続き、読売
新聞社編集局会議
室に於て、日本山
岳会、読売新聞社、
日中友好協会的主
催三団体ならびに
後援団体である N

一九九二年日中ナムチャバルワ

合同登山隊準備開始

一月号の会報『山』五六〇号の年次
晚餐会の記事の見出しに「ナムチャバ
ルワ登山隊再派遣も報告」という記事
が載って以来、一九九二年秋に再挙す
る第二次のナムチャバルワ登山隊の準
備に関する記事が滞っておりまして
が、その後の経緯、準備の状況につき、
一括して報告します。

◆一九九一年隊報告会

十二月二十一日(土)午前十時より麴
町番町グリーンパレスに於て、登山隊
としての検討会を実施、引きつづき、
午後一時より公式報告会、さらに午後
五時より故大西隊員の追悼会を行っ
た。

◆一九九一年隊ナムチャバルワ登山委 員会、同実行委員会解散

二月一日(土)、ナムチャバルワ登山
事務所に於て合同委員会を開催、会計
報告、仮報告書の作成についての報告
があり、これをもって、一九九一年の
登山委員会、実行委員会の任務は終了、
解散することにした。

◆高所登山委員会での検討

二月八日(金)、本会ルームに於て高
所登山委員会を開催、一九九一年隊の
雪崩遭難事故の反省、登頂ルート、の検
討ならびに雪崩遭難事故対策等につい
ての検討会を気象、雪崩等の学識経験
者を交えて実施、併せて一九九二年隊

の登頂時期、タクティックス等につい
ての検討を行った。

◆スポーツ振興基金に助成金申請

平成四年度スポーツ振興基金の「卓
越スポーツに関する助成金」の申請は
二月十四日が提出期限であり、その申
請を行った。

◆登山隊長の選任

登山隊総隊長は、既に十二月七日の
臨時理事会の席上決定していた。しか
し、実質的登山準備の推進者でもある
登山隊長の人選が遅れていたが、二月
十三日(木)の理事会に於て、第一次隊
に引きつづき重廣恒夫常務理事を登山
隊長に選任、総副隊長の人選について
は、正副会長に一任することにした。

◆共催団体との合同会議

二月二十日(木)、山田会長、松田副
会長、重廣登山隊長は読売新聞社に水
上副社長を訪問、一九九二年第二次登

HK を交え、四者会談を行い次の点を
確認した。

- (1) 一九九二年登山隊を昨年度と同様
な体制で派遣する。
- (2) 議定書、報道に関する契約書等の
検討(昨年のものの再検討)
- (3) 連絡体制
- (4) 三月初旬の北京会議参加者の確認
JAC(山田・※斎藤・重廣、
読売(島田・井原、NHK(吉
田)、日中友好協会(村岡)以上
七名訪中の予定。

※注その後斎藤・松田と交替した。
その後、二月二十八日(金)、報道関
係との打合せをJAC・読売・NHK
三者で開催。昨年の隊の精算事務、北
京会談の準備打合せを行った。

席上、一九九二年隊の報道は、読売
新聞社主導の下、読売・NHK 共同取
材の形をとる。上部カメラ撮映要員は

両社で一名を雇いたい旨の説明を受ける。

◆北京会談

昨年度の反省を踏えた第二次登山に
関する日中合同会議が三月五〜七日、
北京で開催されることになり、三月五
日、前記七名が北京へ向う。

会議は、中国登山協会八名、チベッ
ト登山協会三名、日本側七名合計十八
名出席の下、三月六〜七日の両日、北
京飯店に於て開催され、一九九二年日
中合同ナムチャバルワ登山隊の計画に
つき重廣原案を検討の結果、左記の通
りの合意を見た。

①登山隊の目的、登山ルート（昨年の
ルート）、登山の時期（登頂日を十
月十五日とする）、登山方法、隊の
規模等については概ね原案通り了承
された。

②今回の登山隊の名称は次の通りとす
る。

日中国交正常化20周年記念

一九九二年日本・中国ナムチャバル
ワ合同登山隊

③総指揮部についての中国側要望（技
術面のわかる総副隊長格の一名増
員）、高所協力員六名の採用、等
については了承する。

④経費関係については、先方より一九
九一年隊も一〇〇万円を要したとし
て、一九九二年についての予算の倍

海外の山

カトリリーヌの冒険

アイガー北壁。

それは、既に古典的な韻律を湛えた、しかも依然とし
て先鋭的な要素に溢れる、ヨーロッパ・アルプスを代表
する風物詩である。

パリに住む三十二歳の物理学療法専門医師、カトリ
ヌ・デスティヴェルが一九九二年三月九日にやったこと
は、久々にこの壁の存在と人間のチャレンジ精神を思い
起こさせた。

この日午前五時三十分、デスティヴェルは北壁基部二
一〇〇呎のベースから行動を開始した。一・五呎の飲料
水、チョコレート、果物、八・二ミリのザイル二本、
アイゼンとピッケルなどが、高度差千八百呎の北壁で女
性初の冬期単独登攀を支える装備だった。

九時三十分、第一雪田に到着、正午には第三雪田を抜
けて午後三時「神々のトラバース」に到着した。トレ
ニング十分とは言え、相当のスピードである。

三九七〇呎の頂上では、二年前デスティヴェルとトラ
ングのネームレス・タワーをフリーで登ったアメリカの
登山家、ジェフ・ロウが、氷点下二〇度の氷の壁で展開
される「頼もしい妹」の健闘を見守っている。

五歳の時には岩登りを始めたというデスティヴェルは
一九八〇年代半ば、フリークライミングの世界に入り、
各地の国際コンペで活躍した。三十歳になってから、コ
ンペを退き、ビッグウォールへの挑戦を開始する。

九一年にはドリユ西壁に新ルートを開拓、次の目標を

「冬期アイガー北壁ソロ」に絞った。しかし、事前に吹
聴はしなかった。「何からも圧力を受けず、自由でいた
いから」と、その気持ちを語っている。

「登ると決めてから、アイガー北壁を麓から望遠鏡で
一睨、一睨ごとに観察し、ルートを頭に入れた」

その一睨、一睨が今、彼女の手足、筋肉でかち取ら
れ、足下のものとなっていく。

最後はさすがにスローペースとなったが、午後十時三
十分、登頂。十七時間というスピードの凄さは、一九七
八年冬、長谷川恒男が冬期初登攀をなした時の「四
日」、仏女性として初めて登攀したクリスチヌ・コロ
ンベルの「五日」（六十七年、男性ガイドと一緒だった）、
そして冬期単独登攀としては驚異的なスピード記録だっ
たクリストフ・プロフィ（仏）の「十時間」（八六年）、
エリック・エスコフィエ（同）の「十六時間」（八七
年）に次ぐものだった、と言えは十分だろう。

アイガー北壁の初登攀は、一九三八年八月二十一日か
ら二十四日にかけて、ドイツのA・ヘックマイヤー、L
・ヴォルグ、オーストリアのH・ハーラー、F・カスバ
レクの混成チームによってなし遂げられた。女性として
は六四年八月、ドイツのD・ヴォーグが男性ガイドと初
めて登っている。三日がかりだった。

宙づりとなって死んだあのトニー・クルツをはじめ、
この壁に挑戦して命を絶ったクライマーは四十五人い
る。フリー、スピード化がクライミングの世界を変えた
とは言え、女性が単独で冬のアイガー北壁をわずか十七
時間で登った、ということに驚きを感じる。登山史に新
鮮な一歩をもたらす出来事だった。

（江本嘉伸）

海外の山



日中国交正常化
20周年記念

増を要望してきたが、明細がないので、後日FAXで送ってもらい、再検討することにした。

⑤その他、総顧問、名誉総隊長は前回通りとすること。議定書の変更部分について備忘録の交換が必要であること。シンボルマーク、(昨年のも)の年号のみ変更)、支援隊の件、次回の四月下旬の北京会談の内容確認を行った他、装備、食糧、通信、輸送、気象、報道等の具体的打合せを行った。

以上をもって北京会談は、日中合同ナムチャバルワ再挑戦を確認し、準備をすすめることを合意した。なお保留となった登山経費の日本からの援助額については速かに解決する努力をすることを双方確認し、三月八日帰国した。

◇登山隊準備組織の決定

三月十二日(木)開催の理事会において登山計画に関する最高決定機関としてのナムチャバルワ登山委員会の委員

十二名、登山計画の実行推進機関としての実行委員会十四名をそれぞれ決定した。

〔登山委員会〕

委員長 今西寿雄

委員 渡辺兵力、山田二郎、大塚博美、村木潤次郎、藤平正夫、松田雄一、宮下秀樹、鳴原啓佑、平林克敏、湯浅道男、西村政晃

〔実行委員会〕

委員長 山田二郎

副委員長 藤平正夫、松田雄一、齋藤惇生

委員 橋本清、小倉茂輝、重廣恒夫、大倉昌身、大森弘一郎、神崎忠男、村井龍一、伊丹紹泰、関口令安、片岡泰彦

◇募金委員会

委員会の委員は前年通り、全員留任とし、三月十三日(金)募金常任委員会を開催し、募金応募状況の確認を行うと共に、山研不足分ならびに本年度のナムチャバルワ登山隊の資金不足額の検討を行った。企業募金については五

月末日迄の間に極力、経団連関係の募金先を廻り、併せて新規募金先の開拓に努力すること。山研の会員募金については、未応募者に対する再度のお願いを行うこと。とくに支部関係につき重ねてお願いすることにする。

◇第一回登山隊会議の開催

かねてより、重廣隊長より、前回の経験者を中心に参加希望者の呼びかけを行っていたが、具体的準備を開始するために、第一回の登山隊会議を招集し、登山準備の担当別け(装備、食糧、通信、タクティックス、気象・環境保全、輸送・梱包等)、第二回北京会議までの日程等の打ち合せを行った。

なお事務局は、松田を責任者として次の通り担当を決めた。

・登山準備 重慶

・渉外 橋本、伊丹、村井

・財務 大倉、松田

・募金 橋本、伊丹、中沢

・経理・総務 松田、相馬、滝沢(ち)

なお委員は準備の進捗に伴い逐次増

第28回秩父宮記念学術賞授賞

平成三年度の第二十八回秩父宮記念学術賞は「京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊一九八九・一九九〇年の業績」が授賞対象として決定し、その表彰式が日本学術振興会の主催により去る三月十三日(金)午後三時より日本工業倶楽部において秩父宮妃殿下ご臨席のもと、京都大学関係者、日本学術振興会

員していくことにする。

当分の間、毎週金曜日夜を、定例集会とし、登山隊会議は、適宜開催することにする。

さし当り、第二回の登山隊会議は四月十一日(土)、第三回は四月十九日(日)に開催し、第二回北京会議に対する準備を行うことにする。

◇事務局開設

四月一日より本年度登山準備に備えて、常勤体制の事務局を開設、専従事務員として滝沢ちよ子会員(会員番号 一〇三四八)が常駐することになった。

TEL 〇三—三二四九—七九一五
Fax 〇三—三二四九—七九一六
(Y・M)

「京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊」

関係者多数が出席し盛大に行われた。

本会からは山田会長以下関係役員、名誉会員等が出席し祝意を表した。

授賞理由は次の通りである。

〔授賞理由〕

本登山隊は、文部省科学研究費補助金の交付を受けて実施された一連の研究登山計画の第三次隊である。

すでに一九八九年に予備調査のために送り出した第一次隊はムスタグアタ峰(七五六四呎)に登頂するとともに高所医学研究の予備的検討を行っており、第二次隊もクーンブ地域で高所住民の医学学術調査を行ってきた。

こうした成果を踏まえて第三次隊では、ヒマラヤの超高所における医学学術研究という新しい試みの集大成をめざしたもので、シシャパンマ峰(八〇二七呎)の登頂過程における人体の生理学的研究と、周辺地域に於ける高所住民の疫学的調査を展開した。

これらの生理学的研究は、単に登山者の安全のための医学研究にとどまらず、現代医学にとっても重要な意義をもつものである。即ち人体が低酸素下でどのような変化を生じ、どのように低酸素に適応していくのかというメカニズムは明らかではなく、現代医学が直面する課題の中で、脳血管性老人痴呆、脳梗塞、心筋梗塞、慢性肺疾患などは、いずれもその臓器の低酸素症が病態の基盤になっている。したがって低酸素に対する人体の適応という問題は、極めて重要である。他方、地球上の四〇〇〇呎を越える高所にも人類が生活しているが彼らの、低酸素に対する適応メカニズムも、まだ明らかとなっていない。

これまでの低酸素適応に関する生理

学的研究は、平地の低圧実験室の中の短時間に限定された急性実験が中心であったが、これに対しヒマラヤをフィールドとした実験は、広い居住空間の中の自然の営みを保障しながらの調査が可能であり、低酸素を基本病態とする疾病の医学的シミュレーションを行うことができる。

同隊の目的は、ヒマラヤの高所におけるヒトおよびサルが低酸素適応の諸相を、高所生理学、血液学、神経学、心理学、環境科学、社会学、人類学、霊長類学などの医学を中心とする学際的な研究によって、総合的に明らかにしようとするものであった。研究者自身が八〇〇〇呎に登頂し、その過程で自らが被検者となって医学研究を行った登山隊は、世界的にみても例がなく、同隊の得た成果は次のように要約される。

(1) 総勢二十四人の研究者からなる低酸素症の機構解明のための総合的医学学術調査がシシャパンマ峰を舞台に展開された結果、高所における血液・免疫系の変化、心臓超音波断層装置による心・循環機能、脳神経機能の変化、眼底像、胃カメラでの低酸素による胃粘膜病変など、低酸素による人体の多面的変化が明らかにされた。

(2) 七七〇〇呎の最終キャンプで、睡眠中の血液酸素飽和度、脈拍、心電図、

次代に残そう美しい山と溪

脳波、呼吸などの生理学的データを連続記録した。(超高所での終夜記録は極めて稀である)

(3) 定期的に収集した大量の血液サンプルを液体窒素で保存して日本に持ち帰り、血液学的、内分泌学的検討が行われた。(過去に例がない)

(4) ヒマラヤの北側(チベット)と南側(ネパール)で、高所住民の疫学的・文化人類学的調査を実施した。高所住民の血液標本の採取、心電図、呼吸機能、認知・行動機能に関するデータが集積、検討された。

(5) 熟年の副総隊長二名(六十歳、五十九歳)が厳密な医学管理のもとに八〇〇〇呎の登頂に成功した。(高齢者登頂記録としては西独の六十二歳に次ぐ二番目)

(6) 日中両国の女性隊員の八〇〇〇呎峰登頂。

(7) ニホンザル二頭の五六四〇呎への到達(ヒト以外の霊長類としての最高到達記録)と実験動物学的な視点からの低酸素下での適応の生理学的機能が検討された。

さらに同隊を構成する研究者たち

は、この第三次隊の成果をもとに、低酸素と老化、低酸素と小児の発達、高所環境とライフスタイルというように、新たなテーマで、引きつづき第四次、第五次隊をヒマラヤ地域に派遣し、高所に関する医学学術調査研究を継続的に展開している。以上のように、同登山隊の業績は、ヒマラヤ地域をフィールドとした医学を対象にして、長期にわたる調査、研究によって果たされたものであり、「山」に関する学術賞である「秩父宮記念学術賞」に誠にあふわしいものである。(Y・M)

〔编者注〕本稿は、日本学術振興会による「授賞理由」をもとにまとめた。

ヘンダーソン夫人を

読んで

村山雅美

一九五二年秋、マナスル踏査隊がシェルパを雇い上げにダージリンに赴き当時ヒマラヤンクラブの書記であったJ・ヘンダーソン夫人にお世話になったのがJACとのお付き合いの始まりであったのだろう。



(中央がジル、その左はアン、右端はジェン)

ネパールが開国されてヒマラヤが身近なものとなったその頃、名声も高いサーダー・アンタルケイを駆使して、踏査隊の準備を取り仕切ってくれた夫人に纏わる花のように美しいお嬢さんとを今西さんは何かに書いています。翌年三田さんの命を受け今はなき加藤泰安・加藤喜一郎の両氏、田口二郎さんと共に同じ仕事で夫人に会って以来永いお付き合いをさせて戴いてきた私である。ダージリンを離れて夫君と共にペルーに茶園を移し、未亡人となってからは身軽に英国と長女アンが住む米国、南阿ナタールの砂糖黍農園主に嫁いでいる次女ジェンの処とこれが八十のお婆さんの生きざまかと驚く

活発な様子を毎年のクリスマスカードで知っていた。その便りがないのでどうしたのかと思っていた時、あたかも三田さんの一周忌の集いの前日ジェンから悲しい知らせを貰った。

ヘンダーソン夫人は八十八の誕生日を四日あとにした昨年の三月二十四日、おりから誕生日を祝いに来ていたアンにも見とられて心臓麻痺で亡くなった。ロンドン大学出の内科医であるジェンによれば三月十九日の写真のとおり体調は頗るよく平常と変わりなく二十四日の朝自分の寝床で安らかな最後であったという。

近年の手紙等には唯一度の訪日を思い出の旅と懐しんでいた。横さん三田さんと行を共にした静岡の茶園、田口さんに案内された鎌倉のこと、西堀さん、成瀬さん、小原さんはどうしているなどと、マナスル時代を自分のことのように思い続けていたジルであった。残念なことが一つある。旧き良き時代のシェルパを育て上げたジルに登山史を飾る幾多の登山家、登山隊との結束点をシェルパに置いた「シェルパ物語」をジルのライフワークにと頼んだことがこと半ばであったことである。タイプライターが古くてと何度かいつもの強気のジルに似合わない泣き言も今はなつかしい。ジェンに遺品の中に原稿がないかと問い合わせてもある。

遠のいたマナスルの頃を偲ぶよすがのお知らせとする。



三角点の向きについて

古市 進

三角点標石の文字は南を向いていると耳にされた人は少くないでしょう。しかし三角点の文字面は、測量の実際には直接関係のない表札のようなものですから、人々の関心も低くその内実はあまり知られていないと思います。過日忘年山行の折、杓子山の三角点が東北に向いていたことから三角点の向きが話題になり、何人かの人に会報『山』に書いてみたらとすすめられペンをとることにしました。

三角点の文字面に南向きが多いことに漠然と気づいたのは十年程前だったでしょうか。その頃ある山のガイドブックで「三角点は南に向いて設置されている。だから霧や夜で方向を見失ったとき三角点に出会ったら文字面

で方向を確めたらよい」との記述に出会いました。既に南向きでない確実な例外を知っていたので、「三角点は南き」を過信すると危いと思いました。そしてそれ以後初見、再見を含めて三角点に出会う度に文字面の方向を確めるのを新しい興味としてきました。

確めた三角点の数が百を超えた頃、南向きは約七割、東西北はそれぞれ一割前後、また東西南北のいづれでもなく中間を向いた例もあることが分ってきました。丁度その頃昔の知人が書いた山の本で「標字南面説」がはびこることを嘆かれて「筆者も山頂三角点の標字面の方向をチェックしているが正確に南を向いているのは1/2もない」と書かれているのを読みました。ここまでのいい切っけは逆に行き過ぎだと思っただけでした。

一九八七年の夏、若い仲間と北アルプスを縦走した際、蓮華岳で再測量中の国土地理院の方にお会いして話し込んだことがありました。談たまたま三角点に及んだときその方は「三角点は南に向いてますよ、そう設置するよう内部の申し合せがありますから」と軽くいわれました。それで「しかし例外があることは確かですよ」と申しますと、その方は一寸困った顔をされて「そうですか、まあ大体南に向いていればということなんですが」と言葉を濁

されました。その日は針の木峠に幕営し翌朝針ノ木岳に登った所、頂上の三角点は少し西に振れた北向きでした。まだ記憶が新鮮なうちに対面した例外に仲間達も納得顔でした。

このことがあってから私の方では、方向の細かいブレは問題にせず東西南北およびその中間の八方向に大まかに分類するようにしています。そうして一九九一年末までに方向を確めた三等以

計報

阿達憲氏 (会員番号四四〇七)

外務省参与、元陸将、日本電気技師長、日本アルパイン・スキー兵協会 (JASA) 副会長は、三月八日午後十一時、心不全のため、東京・板橋区の自宅で死去、行年八十二歳。同氏は、会報『山』五四二号にも紹介されている通り、国際山岳兵連盟 (IFMS) 加盟の日本の団体であるJASAの副会長として、一九九〇年六月ドイツのミッテンワルトで開催されたIFMSの第五回総会にも日本代表として参加されており、また当会の山行にも寸暇をさいて参加されていた。最近では、昨年十二月の年次晩餐会翌日の大野山記念山行にも参加されており、相変らずの健脚ぶりを見せておられた。ま

上の三角点は四一一を数えますが、その方向別の内訳は次のようになりまし

た。
東二五 (六・一%)、南二九四 (七・五%)、西二九 (四・六%)、北三三 (八・〇%)、その他四〇 (九・七%)。

いうまでもなく国内に設置された三等以上の三角点は四万近くもありますから、前記の不十分な統計で全体を推

た当会のナムチャバルワ合同募金等にも企業を紹介される等、協力されていた。

新聞の紹介によれば、同氏は陸上自衛隊を経て昨年四月、化学兵器の専門家として、国連のイラク大量破壊兵器解体特別委員会の化学兵器グループのメンバーに就任、ニューヨークに滞在されており、たまたま一時帰国されておられたとのことである。

(Y・M)

西岡京治氏 (会員番号四六五五)

本会元会員、国際協力事業団農業専門家である西岡京治氏は、三月二十一日午前十時十五分、急性腎不全のため、ブータンの首都ティンプーの総合病院で死去、行年五十九歳。

同氏はソウルに生れ、大阪府立大学

量する訳にはいきませんが、それでも「三角点は南向きが大多数であるが、南向きが絶体ではない」程度の大まかな結論を保証はできるでしょう。

この拙文の主旨は終りの統計数字に尽きますので、背景説明のために引用した方々の氏名等はすべて省略しましたが、ここに一言お断りして感謝させていただきます。

大学院農学部園芸学科修士課程修了。一九五八年、川喜田二郎氏を隊長とする西北ネパール学術登山隊に参加。その後高校教諭を経て、一九六四年、国際協力事業団の「コロンボ・プラン」農業専門家として夫妻でブータンに渡る。

ブータンでは国営農場で農業の機械化や日本米をはじめとする作物を紹介するなど、同国の発展に貢献し、外国人としてはじめて、英国の「サー」にあたる「ダシヨ」の称号を国王から授けられ、日本・ブータンの両国の親善交流に大きな役割を果たされた。ブータンを訪れた登山隊でお世話になった人も多い。
(留守宅) 西宮市甲陽園本庄町六一七〇 西岡里子(妻) (Y・M)

故森山欽司運輸大臣と

芦安村

田畑真一

ウエストンも親しんだ南アルプスの村・芦安村である。この村で貴重な資料「南アルプス登山日記」が保存されていた。それは青木義源氏宅である。

義源氏の亡父・久治郎の旧蔵品である。久治郎は当時、甲斐山岳会芦安支部の役員であり、自宅を登山者の宿泊所としていた。

前掲資料の昭和十一年の項を調べると、他の記名者よりも一段と筆跡力強く、大きな文字で、昭和十一年三月二十四日宿 静岡高校山岳部森山欽司山崎徳郎案内人名取久平」と書かれている。ただ、他の記名者のほとんどが行先を記入しているのに、森山らについては記入がない。

また、昭和十二年の項には、静岡高等学校山岳部七月九日先輩重光晶森山欽司在校生山崎徳郎垣内政彦芦安一広河原小屋一長衛岩小屋約十日間北岳バットレス登攀斐崎へ下山ノ予定」とあり、案内人名として「清水高雄清水英長」両人の書き加えもある。

森山は先鋭的な登山者であった。私は前掲資料のコピーを森山の令夫人・

森山真弓女史(元官房長官)に差し上げ、事の経緯について申し上げた。すると森山女史から、前掲資料を裏書きする貴重な文献の貸与があった。昭和四年に創刊された旧制静岡高等学校旅行部会報『山彦』やその後の会報『紫岳』の主要記事を集めた『紫岳』昭和五十二年十一月、朝日出版社刊)である。これにより、不明であった森山らの行先が判明。昭和十一年に出た森山の紀行(春の白峰―荒川谷よりの登攀)によれば、芦安村から嬭平小屋やペデの岩小屋・五軒小屋を経て、アスナロ沢などを通して、ようやくにして北岳へ登頂した。帰路は鮎差で炭焼小屋の宿泊。十二日ぶりで芦安村に帰還。

森山は芦安村へ到着したときの状況を「五時芦安に着いた。例の如く青木久治郎方に泊まり、顔見知の久平治太郎と山の話がはずむ」と書いている。鮎差については「やがて雪は霰と化し、一時十五分、鮎差に着いた時は全身濡れ鼠となった。時間はあるが、やむなく夜叉神峠越えを断念して、炭焼き小屋に思わざる一泊することになった。炭焼きが居たので十日ぶりで里人の顔を見、懐しい思いをした」と書いている。さらに芦安村については「空は晴れた。峠を越えると眼下には甲府平野が華やかに展開し、今まで冬の世界に

住み、荒川谷の荒蕪に慣れた我々の胸に、春の到来をしみじみと味わわしめた。午後の日盛りの中を十二日振りて芦安に帰った」と書いている。

思えばルートファインディングによる積雪期登山である。それも案内人・人夫を伴っての無人小屋泊まり。ウエストンが明治三十五年八月、三人の案内人・人夫を伴って北岳へ登頂した(『極東の遊歩場』)あの探検的登山の精神と一脈通じ合う感銘をもつのである。

〈別記〉先人のお名前については敬称を省略させていただきました。

短歌

榛葉華子

真白なる富士の高嶺の幾筋の沢のせせらぎ聞え来る春

宇嶺滝しぶきに美し虹かかり若葉の山峡山桜舞う

世界一属一種キタダケソウ花咲いていたり夏のためより

夏山はご機嫌斜め雨と風子は重き荷を背負いてくれり

北遠の秋を訪ねし支部山行温き笑顔葉しき語らい

新雪にシュプール描く子等の後追いつつ我れもしばし青春

亡き夫と初めて訪ねし峠道夫は短歌口

吟みいし

四句

小林碧郎

迎春花戸毎に垂るる峠口

杣畑に掘り捨てられし路の墓

稚子たつと斑雪ふみゆく幾峠

春山に削がれるのみに武甲立つ

三水会 奥武蔵集会にて

勝田房治

残雪に折れ杉の芯ほの紅し

雪折れの杉の匂へり滝のまへ

白き富士覗く峠路の霜散らし

頬を刺す尾越の風に寒葵

山男らの杵音かろし雪時雨

図書室だより (9)

▼CLIMBINGとMOUNTAINの九

二年度第一号がそれぞれ届きました。CLIMBINGは約五年間のブランクがありました。欠号を埋めて再継続を

始めました。

CLIMBING 一三〇号の主要記事はマッキンレーのガイドが書いたガイドの仕事と、オーストラリアのクライミングとクライミング・エリアの紹介で、毎度のことながらフリークライミング記事のスペースを大きく取っています。

MOUNTAIN 一四三は一四一号からレイアウトを少し変えて見やすくなり、情報部分が増えました。「ベースキャンプのトレッカー達が夕日に映えるK2を写真に撮るべくフラッシュを光らせているのを見下ろしながら」フランス人の二人が三日目のその時刻に北西稜の新ルートから頂上に立った(往復で五日間)時の手記と、十月二十一日にエベレストの上空を世界で始めて飛んだ二台の熱気球の記録が紹介されています。

両雑誌に共通する記事はアメリカ山岳会の年次晩餐会の取材記事で、全会員が自動的に被保険者になれるという画期的な制度の採用、会長がR・ベイツから、クライマーをAACにもっと入会させたいというJ・ウィリアムスンに交替することが紹介されています。

▼海外の登山ガイドブックのうちで新しいものは今年度中に一通り揃いました。図書利用者の中には外国の山に関

書籍・雑誌 受入報告 1992年3月

著 者	書 名/雑誌名	版型・ページ	出版元	出版年	寄贈/購入別
日本勤労者山岳連盟	岩登りの確保技術	A 5/142 pp	日本勤労者山岳連盟	1992	発行者寄贈
大島堅造	山の古典と共に	四六版/284 pp	図書出版社	1992	大島輝夫氏寄贈
宮内敏雄	奥多摩(復刻版)	四六版/386 pp	百水社	1992	発行者寄贈
藤木高嶺	大自然に生きる人びと	B 5/187 pp	くもん出版	1991	著者寄贈
東京都山岳連盟遭難対策委員会	山岳救助技術 岩場編	B 5/23 pp	東京都山岳連盟	1983	購 入
東京都山岳連盟遭難対策委員会	山岳救助技術 冬山編	B 5/54 pp	東京都山岳連盟	1985	購 入
東京都山岳連盟海外委員会	海外登山の手引 改訂版	B 5/286 pp	東京都山岳連盟	1988	購 入
神奈川県立博物館編	南の海からきた丹沢	親書版/226 pp	有隣堂	1991	発行者寄贈
群馬県山岳連盟	憧憬の白き壁	B 5/233 pp	群馬県山岳連盟	1991	発行者寄贈
上村信太郎、岡田まさあき編	ヒマラヤ初登頂物語 ヤマケイコミックススペシャル	A 5/206 pp	山と溪谷社	1991	著者寄贈
大井冷光、吉澤庄作、冠松次郎編	立山連峰誌料 立山権現、立山案内、鋺岳他合本複製	菊版/1306 pp	新興出版社	1991	発行者寄贈
Michael Peyron	GREAT ATLAS TRAVERSE vol. 1	180×120/131 pp	West Col	1989	購 入
Peter Lennon	SCANDINAVIAN MOUNTAINS	180×120/197 pp	West Col	1987	購 入
Eric Bjornstad	DESERT ROCK	152×229/454 pp	Chockstone Press	1988	購 入
John Harlin III	CLIMBER'S GUIDE TO N. AMERICA West Coast	152×229/358 pp	Chockstone Press	1987	購 入
John Harlin III	CLIMBER'S GUIDE TO N. AMERICA East Coast	152×229/396 pp	Chockstone Press	1986	購 入
カティア&モーリス・クラフト	火山からのメッセージ 噴火・溶岩・火砕硫	285×310/158 pp	山と溪谷社	1992	発行者寄贈
Collomb & Wielochowski	MOUNT ELBRUZ REGION Guide and Maps	210×148/63 pp	West Col	1992	購 入
アーネスト・サトウ/庄田元男訳	日本旅行日記1 東洋文庫 544	173×118/316 pp	平凡社	1992	庄田元男氏寄贈
西堀栄三郎	西堀栄三郎選集2 未知なる山・未知なる極地	四六版/407 pp	悠々社	1991	発行者寄贈

する文献を日本語で求める人がいます
が、日本人の登山者はそこまで勤勉で
はありません。英語であれば大抵の地
域をカバーしています。以下に地域と
書名をあげておきますので、是非利
用下さい。

世界全体 ● Kelesy's guide to the
Worlds Mountains

アルプス ● Alpine 4000 m Peaks

北 欧 ● Scandinavian moun-
tains

ヒマラヤ ● Peaks & Passes of
Garwal Himalaya, ●

Trekking in Pakistan &
India, ● Trekking in

Nepal, ● Trekking in
Tibet, ● Trekking in

Indian Himalaya

西アジア ● Trekking in Turkey

カフカス ● Mount Elbruz Region

アンデス ● The Peruvian Andes

メキシコ ● Mexico's Volcanoes

アメリカ ● High Alaska,

● Beeky's Cascade Al-

pine Guide 1, 2 & 3, ●

Climber's guide to N.

America - West & East

● Desert Rock

アフリカ ● Great Atlas Traverse

1 & 2 ● Snowcaps on the

Equator

ニュージーランド ● Tramping in
New Zealand

▼ ナショナル・ジオグラフィック・リ
サーチについては「図書室だより(6)」

で紹介しましたが、一九九一年(第七
巻)のうち三冊が届きました。この巻

から編集スタッフが替わり、雑誌名も
Research & Exploration になりました。

用紙も少し薄くなり開きやすくな
りました。記事は三冊を見る限り同類

の論文を集めている傾向が認められま
す。

(図書管理委員会)



私のスケッチ紀行

— 信濃路と甲斐路を行く

星野貞二著

「やはり絵は光と影の織り成す美に
よって成り立つものである。」と著者
は本文中において記述しているが、こ
の紀行文のスケッチにおいてそれは
はっきりと表われていて、同じスケッ

日本山岳会蔵山岳地図目録 5 ヒマラヤ(3)

A官製 B個人、団体 aシリーズ b単作 c付録 d概念図 eその他

分類番号	発行者	発行年	地名	縮尺
B 3-1 d	吉沢一郎 岩と雪 35 号	1974	THE HINDU KUSH from end to end	c 1 : 800,000
B 3-1 d	高木泰夫 岩と雪 28 号	1973	CENTRAL HINDUKUSH 1	1 : 200,000
B 3-1 d	高木泰夫 岩と雪 29 号	1973	CENTRAL HINDUKUSH 2	do.
B 3-1 d	W. Frey	1967	HUNJAN AREA	1 : 100,000
B 3-1 d	Manchester HDK Exped. 1965	1966	HINDUKUSH AFGANISTAN MUNJAN REGION	1 : 54,000
B 3-1 b	OAV	1972	HOHER HINDUKUSH KOH-E-KESHNIKHAN	1 : 25,000
B 3-1 b	do.	1975	KOH-E-PAMIR	1 : 50,000
B 3-1 b	do.	1975	DARRARH ISSIK-E BALA	1 : 25,000
B 3-1 d	藤田和夫 山岳 52 年	1958	東部ヒンズークシ、フンザ・カラコラム概念図	c 1 : 250,000
B 3-1 d	宮森常雄 岩と雪 30 号	1973	HINDU-KUSH ワハン・チトラル北部	1 : 200,000
B 3-1 d	宮森常雄 岩と雪 31 号	1973	HINDU-KUSH チトラル	do.
B 3-1 d	宮森常雄 岩と雪 33 号	1973	HINDU-KUSH チャンタル、イシュコマン河	do.
B 3-1 d	宮森常雄 岩と雪 34 号	1973	HINDU-KUSH ギザール南部、スワート境界 1	do.
B 3-1 d	宮森常雄 岩と雪 34 号	1973	HINDU-KUSH ギザール南部、スワート境界 2	do.
B 3-1 d	A. Stamm	1968	HINDU-KUSH HINDURAJ DARKOTT	1 : 100,000
B 3-1 d	A. Linsbauer	1967	HINDU-KUSH HINDURAJ CHANTAR GLACIER	1 : 100,000
B 3-1 d	do.	1967	HINDU-KUSH HINDURAJ GAKUCH	do.
B 3-1 d	鈴木正孝	1967	KOTAGAZ, CHHUTIDUM AND LUNGO	1 : 75,000
B 3-1 b	RGS	1939	THE KARAKORAM	1 : 750,000
B 3-1 d	M. Kurz	1952	KARAKORAM	1 : 750,000
B 3-1 d	地形図研究グループ 岳人 243 号	1967	西部バツウラ氷河地域	1 : 250,000
B 3-1 d	地形図研究グループ 岳人 242 号	1967	西部ヒスパー、ピアフォ、チョゴルンマ氷河地域	do.
B 3-1 d	地形図研究グループ 岳人 240 号	1967	東部バルトロ、シアチェン氷河地域	do.
B 3-1 d	地形図研究グループ 岳人 239 号	1967	東部シアチェン、リモ氷河地域	do.
B 3-1 d	J. Wala RGS	1990	OROGRAPHICAL SKETCH MAP KARAKORAM 1	1 : 250,000
B 3-1 d	J. Wala RGS	1990	OROGRAPHICAL SKETCH MAP KARAKORAM 2	do.
B 3-1 d	Leomann Maps	1989	Sheet 1 Gilgit, Hunza, Rakaposh, Batura	1 : 200,000
B 3-1 d	Leomann Maps	1989	Sheet 2 Skardu, Hispar, Biafo	do.
B 3-1 d	Leomann Maps	1989	Sheet 3 K 2, Gasherbrum, Saltoro Groups	do.
B 3-1 d	J. Wala	1987	OROGRAPHICAL SKETCH MAP OF BATURA WALL 1	1 : 100,000
A 3-1 b	中国科学院蘭州水川凍土沙漠研究所	1978	THE MAP OF BATURA GLACIER	1 : 60,000
B 3-1 b	Scheider DAV	1967	MINAPIN (RAKAPOSHI RANGE)	1 : 50,000
B 3-1 c	P. Mott & E. Shipton RGS	1950	HISPAN-BIAFO GLACIAL REGIONS	1 : 253,440
B 3-1 c	M. Spender RGS	1938	PARTS OF KARAKORAM AND AGHIL MOUNTAINS	1 : 250,000
A 3-1 b	INSTITUTO GEOGRAFICO MILITAR	1969	GHIACCIO BALTO	1 : 100,000
A 3-1 b	INSTITUTO GEOGRAFICO MILITAR	1957	K 2	1 : 12,500

チを愛好する者として羨しいほどの光の透明度を感じる。

短時間で描くことの楽しみ、醍醐味は、やった者でなければ分からないと断言してしまうのは言い過ぎであろうか。例えば登山途中の五分の休憩、その間に描きとろうとする意気込みと熱中度、仕上がったスケッチは未完成かもしれないが、風景のクロッキーと言っているほどのその充実感には本人にとっては大きい。

雨の雫が落ちてくる前に色付けをする、かじかんだ手に息を吹きかけながら筆を走らせる、傘を差しながら色にじまないように彩色する、等々、結構スリルを感じながら、何分かの無我夢中が一枚のスケッチとして凝縮される喜び。

本著のスケッチは、緑系の色合いの多様さがこころよい。ここ数年、山を描いてきて、なんとか自分のものとして山の形が表現できるようになり、ようやく落着いて色彩に目を向けれるようになったが、日本の山々の緑の深さは素晴らしいとつくづく思う。なかなか思うような色が出ないことの方が多いが、まあまあ良い仕上がりと思えるものは、緑色の明と暗が生きている時のような気がする。本著のスケッチにもさまざまな緑が思うままに彩色され、生きている。

絵になる場所や自分が気に入っている所は、あまり人に知られたくない、また知らせたくないものであるが、著者はその点たいへん親切で、添えられたある手描きの地図には、写生した場所が「ここからのスケッチ」等と書き込まれていて参考になる。

紀行文の中にも書かれてはいるが、できればスケッチした日時を明記して頂ければと思った。

同好の志が増えることを願う著者のスケッチに対する姿勢は、後半の「信州スケッチ雑感」からくみとることができる。信州の山々、風景に絵を通して接する時の、まっすぐな愛着を感じとれる文章になっている。

さっそくに道具をかかえて、ぶらりスケッチの旅に出てみたい気にさせる紀行文である。

平成三年八月二十日 さきたま出版
会刊 A5判 一四一頁 定価二〇〇〇円
(佐藤知恵子)

千葉大の山 40年

千葉大学山岳部
千葉大学学士山岳会

昭和二十六年に有志の集まりにより設立された千葉大学山岳部は、この度創立四十周年を記念し、標題の記念誌

〔自然保護随想〕

フツウの市民にできること

傲慢でいうのではないが、昨今日本が西欧先進諸国を手本とすべき分野は少なくなったが、自然保護活動となると、まだまだわが国は発展途上であるように思える。

富士山が最も汚れきった晩夏に、学生達と清掃登山に精を出していた頃、「地球は急速に窒息状態に向かっていく」と、ローマクラブが『成長の限界』という警告を出版した。二十年前のことである。爾来、今や酸性雨、オゾン層の破壊など、地球規模的な環境汚染が問題化し、身近かなところでは生活ゴミの処理の行き詰まりや、飲料水の汚染といったことが問題とされている(こうした公害・環境問題の根底には、産業活動に伴う廃棄物と過剰な開発があることは疑いない)。

十年前の環境週間に、東京湾に潜り清掃活動した体験が、以後二度と他人の捨てたゴミを拾うまいと、自分に言い聞かせるきっかけとなった。「護美箱」感覚から脱却して、視野が広く真に自然と共生できる途を見つけた

を刊行した。

戦後、昭和二十四年に県内に散在している各校舎を統合して新制の総合大学として発足した千葉大学にあっては、山岳部の運営にも、多くの苦労があったことと思われる。これらの揺籃期を経て、漸やく部としてのまとまりを見せた矢先、昭和三十二年春の白馬、杓子沢の雪崩による二重遭難事故

い思いから、山岳地の自然保護に取り組む識者の仲間入りをさせてもらった。

清掃登山などの美談を、日本のマスコミは取り上げたがり、時に捏造するが(武田文男著『山で死なないために』所収「藤野さんの遭難死」参照)、そうした姿勢は企業が行っている大規模な自然環境の破壊から、善意のゴミ拾いの当事者や、一般視聴者・読者の目をそらせることにつながらないだろうか。

とはいえ、ヒマラヤの高峰に置き捨てられたゴミの回収に、経済的に困窮している旧ソ連邦が、先のアメリカ隊に続いて清掃登山隊を送るといった記事を目にする、と、負けるな豊かな日本のサミッター達と期待もするし、自らはヒマラヤへ行く日本人登山家やトレッキング客に、自分のゴミは自分で持ち帰る責務を、日本の山岳関係者や旅行者のトップを通じて、伝える行動を取りたいと考える。

ネパールの寒村で、リングの木を植林して喜ばれた日本人の話聞いた。山に限定した自然保護の範囲ではあるが、息の長い計画を模索し、実行プランへと高めたいと、地球サミットを前に思うのである。(市川義輝)

(※)は、山岳部の在り方そのものを問うような、大きな衝撃を受けた。

(※)(編者注)明大山岳部員の雪崩遭難、捜索救助中に発生した雪崩による二重遭難事故。

しかし、その捜索活動を通じて部員は結束し、その後大きく飛躍する基盤が築かれたように見受けられる。即ち、同山岳部は、その後、鈴木、小浜、吉

永等のすぐれたリーダーにも恵まれ、かなりアクティブな大学山岳部として着実な成果をあげ、昭和三十六・三十七年度には全盛期を迎えている。

しかし、これをピークに部員も減少しはじめ、昭和四十年の夏山合宿では、途中で合宿を中止して下山するといふ、当時の大学山岳部にとって、避け

ている。この時には、既に山岳部を卒業し学士入学していた西村OBが、急拠チーフリーダーとして現役に復帰し、事態の収拾に当り、その年の冬には、民主的な運営もと入れながら、厳冬の硫黄尾根からの極地法による槍ヶ岳の往復を果し、見事に行きづまりを打開し、以後今日に至っている。

本書の前半、第一部は「山岳部40年の記録」として各年代のチーフリーダーにより分担執筆され、その間の動きが要領よくまとめられている。

第二部は「海外の記録」として公式遠征記録八隊と現役部員によるネパールの合宿が収録されている他、他の隊に参加した会員の報告も採録されている。

第三部は「山あれこれ」としてOBや会友による思い出、随想が八編、第四部「追悼」には、この四十年の間に物故された会員四名の方の遺稿、追悼がまとめられている。

千葉大学山岳会として特筆すべきことは、海外遠征の成果であろう。一九六三年には、いち早く東ネパールの未踏峰マングールの初登頂を果たし、以後四年毎に、着実に東ネパール、ブータンをフィールドとしてEcological Expeditionを派遣して成果をあげ、ブータン・ヒマラヤでは、一九八五年のナムシラ峰に次いで、昨年はツェン

ダカン峰にも初登頂する快挙をなしている。これらの業績をみて感ずることは、沼田真先生を中心とする、エコロジカルな活動が伝統となつて、にじみでていることである。そしてその成果が第二十一回秩父宮記念学術賞受賞として高く評価されていることは、ご高承の通りである。

このように戦後四十年の一大山岳部の軌跡が、短い文章の中に簡潔にまとめられており、他の大学山岳部にとつても参考になる点が多い。一読をおすすめする次第である。

平成四年二月 千葉大学山岳部・同学士山岳会刊 B5判 一二五頁
非売品であるが、左記へ申込み、領価二〇〇〇円(送料共)で入手できる。〒245横浜市戸塚区和泉町一九五一 小浜浩三宛 (松田雄一)

図説エスキモーの

民族誌

アーネスト・S・バーチJr著
スチュアート・ヘンリィ訳

極地ブームである。海水やオーロラなどの幻想的なイメージをかきたてた「観光」旅行さえある。だが、そこに住む人々の生活や歴史をどれほど理解しているのだろうか、と疑問が湧く。「エスキモー」という言葉から連想さ

れるのは、イグルー、犬ぞり、日本人とよく似た顔等々である。ところがそれ以上の知識となると行き詰まってしまう。風評による知識は正しい理解を妨げ、固定観念をうえつけてしまう。

本書は一九八八年に刊行された「エスキモー」の全訳である。「エスキモー」民族の歴史から解き起こし、社会のしくみ、衣食住の細部へと及び、民族の全貌を明らかにしていく。精神世界にまでアプローチし、彼らが酷寒の地で四千年以上の歴史をもち、いかに工夫して生活してきたかが解き明かされる。我々から見れば単なる民具も、文様や彫刻のひとつひとつが生活と密着した重要な意味をもっていることを知らされる。それらが鮮明な写真で示され、丁寧な脚注とともに、より深い理解の助けとなっている。また、平易だが、質の高い訳文が魅力的である。

訳者はあとがきの中で、「エスキモー」の呼称について言及している。著者は「エスキモー」の呼称を使った理由として、(1)地域ごとで方言による自称が用いられ、「イヌイット」は全体の六〇%未満である。(2)欧米では数百年来使われてきた。(3)社会全体を示す語がない、の三点を挙げている。訳者は本書の標題に疑問を感じつつ著者の主張に従っている。だが、私見と断って次の様な提案を行っている。カナダとグ

リーンランドでは「イヌイット」と改められているが、アラスカの北と南とでは言語集団が異なり、「イヌイット」と「ユイット」と自称している。二つとも人間を意味する呼称で、これら二つのグループをまとめて、「イヌイット・ユイット」としてはどうかと。

訳者の長めのとがきは示唆に富んでいる。民族学に関わる考え方の根幹が示されているからだ。「人種」概念の否定は、これから地球規模の発想で人類を考えるための参考となるだろう。また、日常的に使用している言葉のもつ重大性にも気づかされる。訳者が著者の意図をふまえたうえで、自らの考えを表わす道具としての言葉を選ぶ作業に取り組んでいる姿が浮かびあがってくる。

一九九一年十一月二十日発行 原書
房 二一八頁 三五〇〇円 (宇都木慎一)

朝日連峰の狩人

西澤信雄著

本書を手にして、まず楽しい挿絵と判りやすい文章、興味ある内容に気づく。ここには朝日連峰の麓の大井沢で七

十五歳の現在までクマ撃ちなどの狩り、山菜やキノコ採り、釣りをされてきたほか、自然公園の管理人、遭難救助隊長や朝日連峰のブナ等の原生林を守る会会長を勤められた志田忠儀さんの山の経験談が方言を交えて語られている。志田忠儀さんの話を纏められたのは西澤信雄さんである。語りの内容は、朝日連峰の狩りの有様や山村の雰囲気や伝えていると共に、志田さんの人生記録でもある。山の生活に「嫌だなんて思ったことはないね」とある。狩りの話は狩人に徹し、動物と直接に向かい合っている姿があり、クマを撃つときも慌てず、また、「遭難なんてのは、常識外のことしなければいけないだけ」と語られる。

第一章山暮らしでは、子供の頃に父親の狩りについて歩いていっているうちに自然に動物のことを覚えたことから始まり、朝日が国立公園の候補地になったとき調査の案内を勤めたことなどが回想される。四季折々の山暮らしの仕事の様子。ゼンマイ採りでは山を一番知っていたから自分は一番条件の悪いところに行かなければならなかったが、皆が平均に採れるよう指示したと。

第二章クマ狩りでは、昔ながらの巻き狩などによるクマ撃ちの様々な場面が、狩人達やクマの行動を通してリア

ルに語られている。戦後志田さんがまとめた組では、最初捕れず、名人に聞きにいった話もある。この他、クマの習性、クマの好物、クマ料理、クマの胆の作り方などがあり、この地方のクマとの関わりの深さを感じさせる。

第三章ワナと動物では、ワナを仕掛ける話の他、キツネ、テン、タヌキ、ムササビ、ウサギなどの習性と狩りの出来事について語られる。例えばキツネの足跡について「夜明けになると眠くって、ふらつくんだ」とか。

第四章山の番人では、風雪で亡くなった遭難の救助の様子や、狩りなどで出会った雪崩のことが語られる。

一九九一年九月二十日発行 山と溪谷社刊 B6判 二四〇頁 定価一五〇〇円 (三栖寿生)

北八ガ岳

黒百合ヒュッテ

米川正利著

北八ガ岳を訪れた人で少なくとも一度は黒百合ヒュッテにお世話にならない人はいないだろう。それ程黒百合ヒュッテは人口に膾炙している。しかし余程客の少ない時とか、季節で閑暇な時でもなければ小屋の主人と親しく口を利くことも出来ない。それに二

度三度と訪れて、運よくそんな機会に恵まれば、四方山話に花が咲き、山登りの楽しさが倍加するというものだ。

この度黒百合ヒュッテの主人米川正利さんが、自分も何か本を書きたいという小さな希望を山の仲間と話したところから、その協力を得て出来上ったのが本書だ。小屋にまつわる四方山話から小屋を取巻く自然の移りや、動植物の愛らしさ、可憐さを、あたかも囲炉裏を囲んで、あるいは炬燵に当りながら話すように、素直に飾らずに語っている。

黒百合ヒュッテの生立ちについては、若くして亡くなった父親の年来の希望を受け継いだ末亡人、親類縁者の反対を押切って、小さな子供を抱えながら電灯も水道もない山奥にささやかな小屋を建てたいきさつが、亡き母親に対する慕情と共に語られている。また年々改築増設されていく小屋と共に、そこに働く人々の人物月旦が、ユーモラスに描かれていて、小屋で働く人は皆こうした人々かと錯覚を起こしてしまふ程だ。

山小屋の四季と題する章は本書の圧巻だ。その自然描写はここに長年住んでいる人でなければ到底描けない美しい文章だ。その中であって山小屋の人々と登山者の緩なす人間模様の何と

楽しくも心暖まることよ。

黒百合ヒュッテを知らない人はもちろんのこと、知る人にも是非一読をお薦めしたい。

一九九二年 山と溪谷社刊 四六版 二二五頁 (斎藤健治)

南の海からきた丹沢

―プレートテクトニクス―

不思議―

神奈川県立博物館編

プレートテクトニクス理論による地史の解明は以前とは比較にならないくらい堅固なものになってきました。それは多くの研究者がこのパラダイムの中で考究をするようになったためです。

少し前の海底地図(プレート分割図)を見ると、日本近海は太平洋プレートとフィリピン海プレートが日本海溝と南海トラフのところで沈み込んでいて、日本列島は大陸プレート(ユーラシア・プレート)と海洋プレート(インドア・プレート)と海洋プレートの境界にあるように描かれています。その後の研究の進展により現在のプレート図では、フィリピン海プレートが北に延長され、相模トラフと駿河トラフの二辺の延長線上、伊豆半島の北側のどこかで達していると考えられます。すなわち伊豆半島は日本列島とは異なるプ

レートの北端部にあり、この部分で二つのプレートは押し合っているということです。さらに現在のプレートテクトニクス・パラダイムではフィリピン海プレートの先端部を突き止めることや、糸魚川へ延びる大構造線が日本海に延長され、ユーラシア・プレートを分割する別のプレートの存在が確認されつつあるようです。

さてこの本のタイトル「南の海からきた丹沢」は、伊豆半島の日本への付着(衝突)に先立ち、丹沢山地も同じフィリピン海プレート上の海底火山をその生い立ちとし、北上して付着(衝突)したという考え方を示したものです。

従来の考えでは現在の丹沢の位置に海底火山が噴火し噴出物を蓄え、やがて地向斜となり沈降し一万坪の地層が堆積した。その後丹沢の中心部にマグマの貫入が起り、山地は隆起を始め現在の様な姿になったとされます。新しい考えでは丹沢本体を構成する火山岩類の周囲に存在する時代の新しい堆積岩類の著しい厚さ、激しい褶曲構造や断層、変成作用に注目し、他地域ではけっして見られないこれらの作用の原因を丹沢の「衝突」と伊豆半島の「衝突」に求めています。従来の説明に比べて遥かにダイナミックで大変興味深いものです。

平成三年十二月二十八日 有隣堂刊
新書版 二二六頁 定価九八〇円
(児玉 茂)

MOUNT MCKINLEY the Conquest of Denali

Bradford Washburn
David Roberts 共著

アメリカ山岳会の長老ブラッドフォード・ウォッシュバーンと寄稿家のデビッド・ロバーツの共著『MOUNT MCKINLEY』が昨年末発売された。定価六十ドルという大型豪華本で、「デナリの征服」という副題を持つ。

ウォッシュバーンは「ミスター・マッキンリー」と異名をとる八十歳を過ぎた地理学者。その名を知らない人でも、一九六二年作製の美しい多色刷のマッキンリー地図を一度は見たことがあるだろう。最近では八八年の「ナショナル・ジオグラフィック」誌の付録として発行された最新エベレスト地図の作者と言えは分かると思う。優れた航空写真家であり、アラスカの山岳地帯をとらえた鮮明な写真の数々は、「アメリカン・アルパインジャーナル」誌はじめ多くの雑誌を飾ってきた。ハーバード時代にハンティントン西壁を登ったロバーツは、米国の「アウトサイド」誌での小気味のいい山岳詳

ナムチャバルワ峰登山 上高地山岳研究所改築

合同募金に協力しましょう!

論を綴っている人物として知られている。二人とも、それに本書で重要な役割を果たしているウォッシュバーンのバーバラ夫人もマッキンリー登山史の重要な記録保持者である。ウォッシュバーンは四二年に第三登、四七年にはボストン博物館の科学調査隊を率いて第四登を果たし、夫人も一緒に参加して女性初登頂者となった。ロバーツもウィッカーシャムウォールの新ルートを拓いている。米国を代表するマッキンリーの精通者たちが、優れた写真と文章で、お互いを補完し合いながら、力を尽くして、マッキンリーとそれと挑んだ人間についてまとめている。

著者について何も予備知識がなくても表紙を開いた途端に、この本の魅力に引き込まれて行くことだろう。氷河の描写、純白の雪稜、夕日を反射して輝く河川、岩質が伝わってくる岩肌、氷原を進むカリブーの群れ、生命を育む森林、そして聳え立つマッキンリーの大山塊。いずれも鮮明な写真に、簡潔で余韻を含んだ説明が付されている。

マッキンリーに関しては、多くの写真集・案内書が出版されている。例えば、最近ではJ・ウォーターマンの、『HIGH ALASKA』、B・シャウニートの『TO THE TOP OF DENALI』が相次いで出版された。これらとは性格を異にしているとはいえ、「一家に一冊、マッキンリーの決定版」といった内容を持っているのは本書である。見て楽しく、読んで啓発される好著。印刷は日本で造本も丁寧。登山が趣味でない人に贈っても喜ばれるだろう。

一九九一年十二月 Harry N. Abrams 刊 31頁×27頁 二〇五頁 定価六十ドル (永田秀樹)



報告

第二十回山岳史懇談会

関西学院大学山岳部
七十年の歩み

図書委員会

第二十回山岳史懇談会「関西学院大学山岳部 七十年の歩み」が二月十四日夜ルームで開催された。

大橋図書委員長の司会で橋真琴関西学院山岳会々長(永年会員・九十一歳)の紹介があり、橋氏から懇談会で話す機会を与えられたことへのお礼と時

間の都合で七十年史の半分程説明させてほしい旨挨拶があった。概略を長井弘光氏、各時代のトピックスを塩津正



会場風景

英、藤木高嶺の両氏が語った。

概略 長井弘光

関西学院の概説に続いて「七十年の歩み」を大きく七期に分類して語った。

一、創成期 大正九年(一九二〇)ー大正十四年

大正九年に「精神の向上、健康の増進を第一の目的となし、並びに山岳趣味普及に尽力なすこと」を目的に四名の学生によって発起され、十二月の学生大会で承認をうけ正式に「関西学院高等部登山部」が創立された。

金剛葛城山縦走や六甲登山から出発するも、一般学生を募集した日本アルプス登山は十一年には九班、十二年には八班など盛んで、朝鮮金剛山にも出かけ、また学内の啓蒙運動も著名人を招いて講演会など催していた。十五年には第一回関西学生スキー選手権に出場している。

二、アルピニズム前期 大正十五年(一九二六)ー昭和七年

六甲山の岩場で練習を積み、昭和四年学院が神戸から西宮に移ると部室から徒歩十分程のところにある仁川溪谷

の岩場がホームグレンデとなった。同年に前穂北尾根、鋸八ツ峰にとりくみ、六年三月白馬岳主稜初登をなし十二月富士山でテント使用を試みている。

機関誌として昭和三年「六甲」を創刊し、「二号から」DAS EDELWEISSと改称され現在一六号まで発行している。

三、アルピニズム後期Ⅰ 昭和八年(一九三三)ー昭和十二年

スポーツアルピニズムの意欲的な試み、チーフリーダーの選出、ヒマラヤ研究も盛んに行われ、山行対象の山も北千島、利尻、屋久島へと拡大された。積雪期はとくに鋸岳西面に執着し、

十年末早月ー鋸頂上、翌年三月白萩川ー鋸頂上、チンネ正面初登など成果を上げる一方、早月尾根の遭難で二名を失っている。

四、アルピニズム後期 昭和十三年(一九三八)ー昭和十九年

ヒマラヤを目指し徹底したアルピニズムが追求された。戦争は深刻化した、山行はかえって情熱的となり、より困難さを求め意欲的に行われた。

雪洞の研究が行われ、十五年には鹿島槍北壁中央ルンゼの初登やヒマラヤ登山を想定して関西学院から二十四日間歩いて鋸岳頂上に達した記録も見られる。十四年イラン遠征が為替管理法の施行で直前に中止となり、台湾に向

かい「シンカン山・ハインサ山」に登り、翌年朝鮮冠帽峰・白頭山に登っている。十七年から積雪期は鹿島槍を中心とする後立山極地法による登山計画に移っている。春、荒沢奥壁、翌年鹿島槍信州側トラバース後続けて白馬から針ノ木岳の後立山全縦走などに成功している。

十一月戦技登山研究会(大日本体育会行軍山岳部)が穂高で実施され、岩登りを得意とする部員が唯一人学生山岳界から選ばれ参加している。多くの部員の入営が決まり、一月富士山における出陣壮行登山をもって休部状態にはいった。

五、戦後復興期 昭和二十年(一九四五)ー昭和三十一年

後立山を中心に復活、二十三年夏鹿島槍正面ルンゼ、翌年春極地法による白馬ー鹿島槍、二十九年冬信州ー富山、三十一年春杵池ー鹿島槍往復は戦前考えていた山行を完成したといえる。

このような実績がOBと合同のアンデスや学生だけのローガン遠征へと発展していく。そしてバリエーションが中心、岩も夏から厳冬期へと尖鋭化していく。「戦後最盛期」昭和後期以降は時間の都合で省略します。

トピックスー 塩津正英

昭和九年カクネ里鹿島槍北壁中央ルンゼの初登を目前に墜落したこと。十

年北千島の幌筵、占守に出かけ幌筵の荒川岳頂上付近でガスにまかれ、磁石をみると針がくるくる廻る局所磁気に悩まされたこと。占守島で一夜お世話になった別所様を撮った写真が五十二年佐々保雄元日本山岳会々長が編さんされた別所二郎蔵さんの手記「わが北千島記」に載っているのをみて驚いたことなど語った。

トビックスⅡ 藤木高嶺

戦後復興期は軍隊帰りの上級生ばかりで軍隊調でシゴかれた。装備がない時代で互いに貸し借りして登山したが、父所蔵の寝袋を貸したところ三度も遭難死する事故が起きた。昭和二十四年春全宿泊を雪洞にした後立山極地法登山の際、アタック隊の帰りを待って雪洞で十七日間待機、下界では遭難報道で大さわぎしていたことなど語った。

その後懇談会に移り、お持たせの灘の銘酒を賞味しながら、上京した尾崎三戸田、日上、高田(現役)の諸氏からもそれぞれ話題が提供され会員との懇談が夜遅くまで続いた。

コールの披露に続き、関学関係者が校歌「空の翼」を歌い、ミッションスクールらしく讃美歌四〇五「また会う日まで」を出席者全員で合唱し再会を約して散会した。

関西学院山岳部側が八名上京する熱

意に本部側も会長・副会長を含む多数の出席で盛会となった。

出席者三十五名 (南井英弘)

マッキンリー

気象観測報告会(下)

科学研究委員会

図3はフェアバンクス上空五〇〇mb

とデナリパスの風速を比較したものである。地形的にもデナリパスの風速は大気中のもより大きいはずであるのに、半分以下となっている他、時々負の値を示している。さらに風速の時間的変化が八月十二日以降は矩形的となっている。一方デナリパスの風向のデータも時間と共に矩形的変化を示している。これらの点からプロペラ式風速計が何らかの原因で次第に風向に追従できなくなり、異常な測定値を出したものと考えられる。そうだとすれば風速計に加わる風圧も過大となり、センターを支えていたワイヤーが疲労破壊を起した事実とも符号する。風速計の改良が是非必要である。一方気圧の低い場所におけるプロペラ式風速計の測定値に気圧補正を加えるべきかどうかについてもなお検討の余地があることが指摘された。

本年六月にはこれらの状況をふま

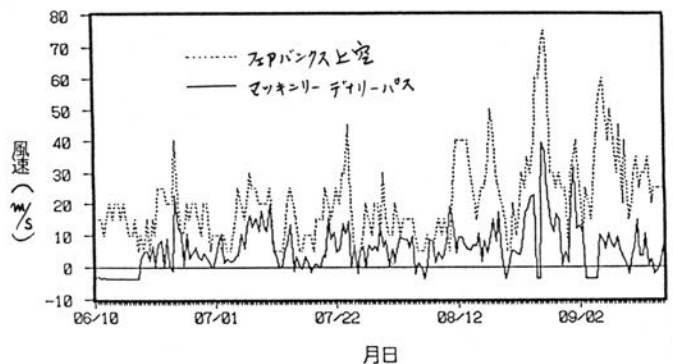


図3

え、大蔵隊長以下、慶大理工体育山岳会員やソロモン氏など六名による第三次気象観測機器設置登山隊が計画されている。その特徴は次の五点である。

①支柱棒が倒れないよう、岩盤の固定したレール上に棒を取付け、径四ミリのワイヤーロープ十二本で張る。

②観測項目として気温、平均風速、瞬間最大風速、風向、気圧、および庫内温度を選ぶ。

③十分毎および一時間毎のデータを一年間記録すると共に、レダトランスポンダによってリアルタイムのデータ

を山麓のタルキートナ基地でも受信する。

支柱棒の新しい取付法やトランスポンダの交信に関しては既にマッキンリー国立公園関係者から諒承を得ている。

④プロペラ式風速計の構造を改良するとともに、超音波式やロビンソン型風速計による同時観測も試みる。レダトランスポンダ風速計のテストは三月富士山頂で実施の予定である。

⑤高所とBCにおける気象状況の相関も調べるため、マッキンリーBCのウエストフォーク氷河にも気象観測点を設置したい。

日本山岳会からは五十万円の協力金を頂いた。計器の製作に努力して頂いた白山工業、低温テストやさまぎまの実験をやって頂いた慶大理工学部、計画の初期から後援頂いた科学研究委員会に感謝申し上げるとともに、会員各位の今後のご支援をお願い申し上げます。

参加者 江村真一、鳥居亮、中世古隆司、奥山巖、大蔵喜福、中村あや、石田要久、高橋詢、大井正一、廣瀬学、大島輝夫、松丸秀夫、北野忠彦、内山太郎、新井陽一郎、大森弘一郎、嶋原一男、大友裕美、石井恵美子、小林正幸、ハロルド・ソロモン、千葉信一郎、松田雄一、中川武、林栄二、木村カズ

ミ、清水輝和子、石井和子、吉田雅子、中村年寿、中村純二 以上三十一名
(中村純二)

新入会員

オリエンテーション

の開催

総務委員会

平成三年度入会者を対象に三月十四日(土)十四時から会室において開催した。首都圏在住者を中心に三十五名が出席したが、富山県、長野県、山梨県からの参加もあり、手狭な会場だったが我々の会室であるという満足感そして期待と熱意が溢れた一日であった。

定刻、小倉常務理事の開会のことばで始り山田会長挨拶、松田副会長から組織と活動状況について説明あり、崎理事の講演、委員会紹介(山研、女性懇、海外連絡、山岳編集、総務)と続き、その後二班に分かれて自己紹介と意見交換を行った。十七時三十分から機の配置を替えて新入会員歓迎パーティーを行い役員委員二十名も加わり会員相互の懇親をさらに深めて十九時に南川理事の閉会の挨拶で散会した。

(中村 昭)

ナムチャ登山
山研 改 築 合同募金に協力を!

オリエンテーションに

参加して

一〇八九七 蜂谷益雄

日本山岳会!! 文字通り日本の山岳に関する最高の権威の方々が集まっておられ私のような素人に多少毛が生えた程度の者が、本当に入れるのか心配していましたが、何と無事パス。

山を愛する私にとって本会はヒマラヤと同様、高嶺の花でした。しかし今回のオリエンテーションに参加して本当にビックリしたことは、本会の奥行きがヒマラヤ同様非常に深く、単に氷、高所登山をこなす者だけのための山岳会でなく、広く一般に門戸が開かれていたことです。

「自分の山歴を語るとは基本的にタブー」とのことで、正に崇高な精神を持った紳士淑女の本物のクラブであることを実感しました。とにかくこの種の山岳会では自分の山歴を誇示したがるものですが、さすがにプロ中のプロと感心させられました。自己紹介では若いバリバリから還暦を過ぎた方もおられ、さらに絵本を描いたり、身障者の登山を扶助している方もおられ、これは普通の山岳会では考えられない凄味を感じました。富士市から駆け付けられた方もおられました。先輩の

方々からは本会の概要説明と本会から何を求めるのではなく、何をなすべきかを考え、本物のクラブライフを楽しむようにとのご指導がありました。

確かに本会は山岳会のヒマラヤでしょう。ヒマラヤの麓にきた(本会に入っ)以上やはり行動しなければと思いました。エベレストに登る人はエベレストへ、K2も良いでしょう。マナスルも良い。しかし高所に行くだけが山登りではありません。山麓には綺麗な花が沢山あるので花の研究をするのも良いでしょう。絵を描くも良し、写真、詩、散策、民族研究、川の底から宝石を拾うのも楽しみです。山の楽しみ方はいろいろあるはずです。

本会での活動も同じでしょう。各自が山を通じて全ゆる分野で活躍することを本会は望んでいるとのこと。山を愛する人は個性が強く、意見が異り激論になることもあると思いますが大いに語り合い、良識を持って本会で活動、貢献、新規案件への取組みなどを本会は希望しているようです。

我々山を愛する者は山を通じて大自然に語りかけ、大自然の偉大さを知り、神への祈りを捧げているのではないのでしょうか。

怖い日本山岳会だと思っていました。皆さん真面目で紳士淑女だし、自分自身のためにも日本山岳会を通して何

か人生にお役に立つことをしたいと感じました。偉そうに言ってもどれ程実行出来るか判りませんが、オリエンテーションに参加して本会から受けた最初の印象と考えをまとめてみました。

三水会現地集会

房州・高岩山

三月の現地集会は、五年連続の高岩山で行われた。高岩山はマザー牧場で有名な房総半島・鹿野山の南東約七キロ、半島のほぼ中央に位置する、標高三一五呎の山である。この山は標高こそ低いが、いく筋もの尾根と谷に囲まれており、国体の登山会場となったこともある。

集会は八日午後三時三十分、君津駅集合から始まった。手配したマイクロボス二台に分乗し、山麓の国民宿舎・清和に向った。宿ではひと風呂浴びた後、幹事より五年連続参加者に記念品の贈呈があり、次いでカラオケも用意された懇親会に移って、賑やかな夜となった。

明けて九日は、快晴で風もなく、絶好の登山日和となった。総勢二十九名、マイクロボスにて宿舎を出発、登山口の高岩第一トンネル前へ向った。登山



(カット 宇都木慎一氏)

口ではいつもの通り、中さん指導による準備体操を行った後、勝田コースリーダーを先頭に登りにかった。道は杉と檜の薄暗い林から始まり、雄木林のジグザクの急坂へと続いた。登り始めて約三十分、一汗かくころ明るく開けた石射太郎山の肩に到着。この山の南側は、垂直に切れ落ちた岩壁が裾まで続き、周囲のおだやかな山とは対照的な姿を示していた。

小休止の後、小さな登り下りのある尾根道を、シュランやアオイの花を見ながら高石山を目指した。途中、ところどころ杉や檜の伐採が行われていて、前年とはまた違った景色を見せていた。休憩から約一時間、高石観音に

到着。ここには二十数段の垂直な岩壁があり、その下部に石をくり抜いて作られた木造の堂がある。この先適当な場所がないので、少し早いがここで昼食をとることとした。

食事休憩の後、十五分で頂上到着。頂上は二つの大きな岩でできていて、十数名も立つといっぱいの広さである。われわれは二組に分けて頂上に立つことにした。頂上からは空気が澄んでいけば富士山、丹沢、伊豆の天城山まで見渡すことができるといわれているが、この日は薄く春霞がかかり、これらを望むことはできなかった。しかし、三六〇度、見渡す限り無数の連なる山が幾重にも重なりあって、九十九谷といわれる景観を見ることができた。

景色を堪能した後、だらだらとした尾根道を八郎塚へ向った。八郎塚手前の鞍部には今日の縦走路中、唯一ベンチの置かれた場所があり、小休止することにした。ここから先は下る一方であり、小休止を大休止にする組と、八郎塚山頂を往復する組とに別れ、それぞれ思いのまま楽しんだ。山頂組が帰るのを待ち、奥畑の集落に向け出発。この道は南向きの急斜面につけられていて眺めがよく、鼻歌でも歌いながら歩きたくなるところである。暫く歩いて奥畑に着き、迎えのマイ

クロバスで昨日出発した君津駅に戻り、無事、早春の花と日だまりの山行を終了した。

なお、この後、有志二十四名は、恒例となった反省会を、木更津駅前で行った後、フェリーあるいは電車で帰路について行った。

参加者 秋山光平、網倉卓爾、荒木正弘、岡野修(幹事)、乾能尚、岩堀瑞子、勝田房治、加藤敏子、川上進、川上光久、菊地文雄、木村俊博、斉藤健治、酒匂輝昌(幹事)、佐藤恒雄、島崎昭、妹尾幸雄・律子、高田眞哉、武田幸男、千葉保之、遠田栄・篤子、中保、中沢喜久郎、平沢哲臣、平戸孝夫、平山暁子、横溝修一 (酒匂輝昌)

・会務報告

三月定例理事会

三月十二日(木) 十九時
場所：本会会議室

出席者：山田会長、藤平、松田両副会長、小倉(茂)、大倉、大森、小倉(厚)、入沢、穴田、山本、村井、石橋、神崎、南川、関口、藤井、山口、片岡各理事、飯野、中島両監事、嶋原、橋本、斎藤、湯浅各常任評議員、
委任：重広、伊丹両理事、西村常任評議員

(審議・報告事項)

一、中国登山協会との協議の件

三月五(八)日に北京で会談を行った。当方から登頂の時期を早めること、気象の専門家を同行させる点を提案、中国側は高所協力員を六名使用すること、総指揮部を強化すること等が提案され、一九九二年の計画については大筋の合意が得られた。

日中友好協会からの提案で日中国交正常化二十周年記念の冠を隊の名称につけることとなった。

二、上高地山岳研究所の件

自転車振興会からの補助金はほぼ満額交付の連絡があった。

女性懇談会から、同会の予備金を合同募金への寄付したい旨の報告があった。

三、平成四年度事業計画案および予算案の件

予算原案に対し関係理事と折衝の結果、自然保護、科学研究、学生部等を増額した。一方事業計画案については、一部補正訂正を行った上承認された。

四、募金状況(92・3・10現在)

会員：一〇七九名、一九、七〇八千円
企業：未収含四三、四六四、四九三円

(委員会報告)

*中高年登山対策全国大会は理事十二名、支部より四十三名参加。

*UIAA総会日程が決定。十月八、九、十、十一日 於松本

*中国青海省主催の崑崙国際キャンプ参加計画を立案(六月末～七月中旬)公募の予定。

*第三次海外登山はアムネマチンに決定。(青年部)

〔その他〕

*五月十六日通常総会、於コープビル
*シェラクラブ百周年記念晩餐会に
(五月二日)メッセージを贈る件は
佐々元会長にお願いする。
(入会承認者)

岩崎美智子氏他二十九名

・ルーム日誌

(3月)

2日 総務委員会
3日 山岳図書を読む夕べ
4日 青年部
5日 指導委準備会、自然保護委員会
9日 総務委員会
11日 集委会、山研委員会
12日 常務理事会、理事会
13日 図書委員会、募金委員会
14日 新入会員オリエンテーション
16日 総務委員会
17日 フィールド、学生部指導、自然保護
18日 三水会
19日 女性懇談会
23日 資料委、指導委、山岳編集委
24日 自然保護委員会

25日 集委会、学生部指導
26日 科学委員会、海外委員会
27日 自然保護講演会
30日 図書管理委員会、総務委員会
3月来室者512名

……… 会員異動 ……… 3月

物故

阿達 憲(四四〇七) 3・9
早坂敬二郎(七八二四) 3・22
佐藤金一(二五〇五) 91・12・6
退会

立平宣雄(四〇八〇)
川村 勉(七五〇七)
小段 賢(九四九三)
三浦玲子(九九四〇)

山研・ナムチャ合同募金応募状況

募金を始めて九ヶ月を経過し、このところ応募状況が減速してきております。応募者数は会員総数の四分の一にも達しておりませんので、まだまだ多数の方が応募してくださるものと期待しておりますが、山研は五月初めから工事にとりかかりましたし、ナムチャバルワも着々と登山準備を進めております関係で、一日でも早く目標を達成出来まよう会員の皆様のご協力を切にお願いする次第です。

(四月九日現在)

(二十口) 橋本龍太郎、牧内薫、(六口) 永田好行、小倉童子、大森薫雄、上條岳人、(四口) 堀秀臣・光子、(二口) 田邊卓司、砂押典子、杉井昭雄、伏見紀子、亜厂文代、倉持ノリ子、川上忠義、相馬勉、阿部健也、児玉俊子、山本晃弘、松井美恵子、高寺紀子、新村貞男、古市進、青池格、石森長博、宮本数男、三谷忠男、田立泰彦
(累計一千一百一名 四千三・六口 二千八万八千二百九十九円)



☎ 3234-6659

この電話でもお知らせしています

●全国集会のお知らせ

女性登山史をテーマに全国集会を開催致しますので、多数ご参加下さい。

全国集会・八月二十九日(土)

御岳山周辺山行・八月三十日(日)

宿泊・三楽荘(ケーブル終点より徒歩十分)

歩十分

地図 二万五千分の一「武蔵御岳」
会費・九千円

切・七月十日(女性懇談会宛葉書でお申込み下さい)

申込み者に詳細お知らせ致します。
お問い合わせ・穴田雪江(朝九時前)
〇三・三九二五・五五三三
宮澤美渚子(夜八時過)

〇三・三三九九・三五一九

女性懇談会

●三頭山と都民の森を歩く

ー環境月間の行事としてー

新緑のブナ観察と、環境破壊の現地視察を行います。昨夏の台風で壊滅的な被害を受けた「奥多摩周遊道路」も四月から開通しました。

土砂流出の主原因と見られている「都民の森」も再開に向けて急ピッチの工事中です。

日時 平成四年六月七日(日)

コース 立川⇨武蔵五日市⇨数馬⇨都民の森⇨鞆口⇨三頭山⇨鞆口

峠⇨数馬⇨武蔵五日市

集合 武蔵五日市駅前八時四十分。八時五十分発数馬行きバスに乗

車。立川八時六分発武蔵五日市行きが接続します。

費用 五〇〇円(保険料・資料代)他に交通費が必要です。都区以遠

の人は「奥多摩秋川自由切符」が安くなります。

地図 二万五千分の一「猪丸」
申込み ハガキに、氏名、住所、電話

番号、生年月日を記入して、ルーマの自然保護委員会宛、申込むこと。六月三日(水)必着締切り。バス時刻が変更になるかも知れませんが、申込み方法を守って下さい。雨でも行きます。(歩行三～五時間)

自然保護委員会

●藤江幾太郎・山の画展・第37回

・七月一日(水)～七日(火)
十一時～十八時三十分(日曜、最終日十七時)

・朝日アートギャラリー

JR有楽町。地下鉄丸の内線、銀座。C4口 中央区銀座四一〇〇(朝日旅行センター奥)

☎〇三―三五五五―七七四〇
・油絵新作80号～3号約二十点の他、ネパール画集刊行記念Ⅱ室併設します。

●藤江幾太郎・ネパール油絵展

(一九六八～九二)

・七月十九日(日)～八月二十三日(日)五週間

・信州大町市立山岳博物館、主催

JR信州大町(大糸線)タクシー五分

☎〇二六―二二二―二二二

・油絵100号80号等のネパール作品中心に、約五十点出陳。(68～92の作)
・入場料三〇〇円(資料室、動物飼育園入場料共)

訂正 一月号(五六〇)三頁三段目泉尾忠夫氏の出身校が広島市立商業とあるのは広島市立工業、五頁上段同氏の福岡在住とあるのは広島在住の誤りにつき訂正いたします。

編集後記 ◆紙面でみられる通りナムチャバルワ登山も上高地山研も忙しくなってきました。会員諸兄姉の一層のご協力をお願い致します。◆このところやむを得ぬ個人的理由で、校正は故郷の新潟でやっています。新潟は今、桜の花盛りで、周囲は白い雪山が美しい姿を見せています。(A・O)

平成四年五月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 山田二郎
編集代表 小倉厚

電話東京(326)四四三三

振替口座 東京三二四八二九番
東京都港区赤坂一―三―六
赤坂グレースビル

印刷所 株式会社 技報堂